

## 万葉翡翠

富田林の錦織公園で、「かわせみウォッチング」をしました。

そこはかわせみ愛好家だけの秘密の場所で、小さな森の小さな泉、妖精たちの午後のひと時、穏やかな光が樹間にこぼれ、水辺の陽だまりには人々が集い、静かに流れる時間の中で、かわせみに出会える時を待つのです。

「まだですか」「もうすぐですよ」「かわせみって鳥の宝石っていわれてるんでしょう」「そうですね」「それって、ダイヤかルビーなんでしょうか」「いいえ背中が青いからサファイヤでしょう」「無責任なこと言わないで下さい。かわせみは昔から翡翠といわれているんです」「でも、変な鳥ですよ、くちばしがでっかくて、小さいくせに生意気っていうか……」「宝石に例えたりするから気位が高いんじゃないですか」「ところで、いつになったら出てくるんです」

あなた方が煩いから、出たくても出られないじゃないですか。静かにしてごらんなさい。ちょうど、泉の上の木の枝の先、木漏れ日に羽根をキラキラと光らせて、ほら、かわせみが止まっている。

かわせみは、古い時代には「そにどり」と呼ばれていました。「翠鳥」です。古事記の中で、こんな歌謡を見つけました。

そにどりの あをきみけしを まつぶさに 取りよそひ  
おきつどり むな見るとき はばたきも こもふさわず  
へつなみ そにぬきうて

かわせみの青い服を粹に羽織って、着心地を確かめたりしたが、あんまり俺には似合わないなあ、と後ろの波間にポイと捨ててしまったよ と、いうようなことでしょうか。この人物は旅に出ようとして、着て行く衣装を選んでいられるでしょう。これは長い歌謡の一部分で、最後にこんな歌が出てきます。

いとこやの いものみこと むらとりの わがむれいなば  
ひけとりの わがひけいなば 泣かじとは なはいふとも  
やまとの ひともとすすき うなかぶし なが泣かさまし  
あさあめの きりに立たむぞ わかくさの つまのみこと

愛しい妻よ、俺が仲間と旅立っても、気丈にも泣いたりしないとお前はいうが、山のふもとのおすすきのように、うな垂れて泣いてるお前が俺には見えて、朝の雨に寂しく佇んでいるお前が惚ばれて、ああ、何とも切なくなってくるよ

うーん、何か昔の小林旭の「赤い夕日の渡り鳥」という感じですねえ。で、その次には奥さんの歌謡で、これはその頭の部分ですが、

ヤチホコの神のみことや あが大国主 なこそは をにいませば  
うちみる 島のさきざき かきみる いそのさきおちず  
わかくさの つま持たせらめ あはもよ めにしあれば  
なをきて をはなし なをきて つまはなし

私の大国主さま、あなたは男だから、島や磯の先々に沢山の妻をお持ちです。でも私は女ですものね、あなただけなんです、男の方は

もうおわかりですね。この浮気な男は出雲神話の主演、大国主の神、もちろんこの奥さんは、大国主がまだ<オホナムチ>と呼ばれていたころに出会った、根の国のスサノオの娘、スセリビメという訳です。

この歌謡が交わされた頃は、たぶん出雲の国が繁栄の頂点にあった平和な時で、そうなる男には浮気心が芽生えて、あちこちに沢山妻を作ってしまう。もちろん国を大きくするためとは分かっている、若い頃から苦労を供にした妻としては面白くない。そこで、ついヤキモチのひとつも焼いて、喧嘩になって、「俺が出て行きゃいいんだろ」と男が言って、「私にはあなたしかいないんです」と、殺し文句で女が答えて、そうなる神様だって人の子です(?)、ついつい「俺が一番愛してるのはお前じゃないか」で、メデタシメデタシとなるのは昔も今も同じようです。

ところで、この夫婦喧嘩の原因は高志の国のヌナカワヒメという女性なんです、本日の主演は、実はこのヌナカワヒメなんです。

高志の国は今でいう、越後の国、いや新潟県、ここに住む絶世の美女、ヌナカワヒメの噂を聞いた大国主が、はるばる出雲の国から高志の国まで妻問いにやってくることが、先ほどの夫婦喧嘩に繋がり、さらには今から語る古代史の大きな謎に繋がっているんです。万葉集に次のような歌があります。

沼名川の底なる玉 求めて得まし玉かも 拾ひて得まし玉かも  
あたらしき君が 老ゆらく惜しも (3247、読人知らず)

沼名川の深い川底にある玉、捜し求めてやっと手に入れた玉、この玉のようにかけがえのない君が老いてゆくのは、なんとも切ないことなのです。

この沼名川は新潟県の姫川のこととされています。古事記にいう高志の国で、今の新潟県糸魚川のあたりです。その川の底には、太古の昔から人々が探し求めた美しい玉、古代翡翠が眠っている。ところが、かつては翡翠は国内で産出されず、古代の勾玉などの形で発掘される翡翠も、その原石は大陸からもたらされたものと考えられていました。この歌に出てくる沼名川は実在しない天にある思想上の川で、底なる玉は作者の心象風景という解釈が万葉学者の主流だったのです。

姫川支流の小滝川で、翡翠が発見されたのは昭和13年、さらに姫川下流の縄文遺跡で加工後の勾玉や工房跡が発見され、糸魚川周辺が古代翡翠の一大産地だったことが知られるようになったのは20年代。それはヤチホコの神と高志の国のヌナ

ガワヒメの妻問いの物語には、翡翠という大きな宝物が隠されていたことを明らかにしたのです。

松本清張の初期の短編「万葉翡翠」は、この古代翡翠の謎を取り上げた作品ですが、この中で作者は登場人物の万葉研究家にこんなふうに語らせています。

「悲しいことに現在の万葉学の権威はみんな先学の説を引いていて、翡翠は国内では産出されず、沼名川はあくまで想像上の架空のものとされているんだよ」

この小説が発表されたのは昭和35年、ちなみに昭和55年に発売された新潮日本古典集成では、「沼名川 新潟県西部の姫川がこの名で呼ばれ、玉の産地として知られていた」と注釈にありました。小説では主人公の万葉研究家が、当時の万葉学の常識に抗して、沼名川が実在の川であり、そこには古代翡翠が存在したことを暴いていく、いわゆる清張古代史が鮮やかに展開されるのですが、当時すでに報告されていたと思われる糸魚川周辺での考古学成果には全く触れられていない。うーん、まあ、しかし、松本清張という巨人にとって、この僕の瑣末な疑問は、いらざる詮索というものでしょうか。

又ナカワヒメの故郷は糸魚川の上流、上信越の山々に抱かれた枝網のような渓谷の一つ、そこには太古の昔から変わることのない清冽な水の流れる川があって、その底には古代の翡翠がひっそりと輝きを潜め、川の上の木の枝には、驚くほどのカワセミたちが羽根を休め、木漏れ日を浴びてキラキラと輝いているのです。

ハナミズキは白が好きです。大阪の住之江公園に、見上げるような大きな白のハナミズキがあります。どういう訳かそこを歩くときはいつも夕暮れで、暮れなずむ空にハナミズキの花が、沢山の白い鳥のように見えるのです。まるで春の訪れとともに、北の空に飛び立とうとしている鳥たちのように - - -。

でも毎年この時期は、僕には憂鬱な季節です。花粉症、え、今年はもう終わりだろうって、いえいえ、それは杉でしょう。僕の花粉症は杉とは違うんです。病院で、その宣告を受けた時の僕の衝撃を想像してみてください。「スギでも、ヒノキでもなかった」 そう、ぼくの花粉症は、スギでも、ヒノキでも、カバでも、ダニでも、ホコリでも、カンジダでも、ネコ（動物の）でもなかったのです。

<イネ科植物花粉アレルギー症候群>、これが、僕の正式の病名です。

「イネ科.....というとなんなんですか」

「カモガヤ、オオアワモリ、ハルガヤといったような、ようするに雑草ですな」

「はあ.....」

「お気の毒ですが、現在の医学ではこの病に対する適切な治療法は発見されていないんです。ようするに不治の病ですな」

「はあ.....」

「で、あとどのぐらいの寿命かということも、現段階では申し上げにくいんです」

「はあ.....」

「では、そういうことで、さようなら」「さようならって、せつ先生 !」

ということで、今日はこのへんで、さようなら。